

## あんばさま

茨城県稲敷市阿波いなしきし あばにある大杉神社おおすぎは、古くから「あんばさま」の呼び名で親しまれています。そこにまつられている神は、疫病えきびょうよけ、家内安全、海上・水上安全の神として各地に広がっていきました。

栃木県内においても、「あんばさま」は、大切な人の健康や安全を願う、とても身近な信仰しんこうといえます。

〈鹿沼市の「板荷のアンバ様」の例〉

板荷のアンバ様は、毎年3月第1土・日曜日に、大杉神社をかたどったおみこしをかついで地域内を回り、健康、家内安全を願う行事です。お神輿みこしは、普段おき納められている日枝神社ひえを出発すると、大杉ばやしにのり、大天狗てんぐ・小天狗・獅子などととも地域内全ての家を巡ります。

途中、厄払いやくばらいをする家では、大天狗・小天狗が「アンバ大杉大明神 悪魔あくま払ってヨイのヨイのヨイ」と大声を出して悪魔を払い、獅子がそれを食べるという儀式ぎしきを行います。

150年以上続く、板荷に春の訪れを告げる伝統的な行事です。



悪魔払いをする獅子

(平成6年 柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

〈大杉神社と「あんばさま」〉

昔、阿波あばのあたりで、伝染病でんせんが流行し、たくさんの方が苦しんでいました。そこを通りかかった旅のお坊さんぼうさん（勝道上人しょうどうじんのう）が、「あんばさま」の宿しゆく大きな杉みわやまに願ったところ、奈良県の三輪山から神々（三神）が助けにやってきて、人々を病気から救いました。

それから阿波に、あんばさまと三神がまつられるようになり、それが大杉神社の始まりといわれています。

日光開山の祖である勝道しょうどう上人が、奈良県の三輪山みわやまから、栃木県の日光をめぐす旅をしていた時のお話です。

「あんばさま」は、ご神木である大きな杉やどに宿しているとされることから「大杉大明神」とも呼ばれます。

## 川俣の元服式（かわまたのげんぷくしき）

日光市の川俣地区では、男子が数え年<sup>※</sup>20才の成人を<sup>むか</sup>迎えると元服式を行います。これは、遠い親戚<sup>しんせき</sup>などの中から、成人した後に様々な場面で世話をしてくれる親分を選び、親分・子分の関係を結ぶ<sup>ぎしき</sup>儀式です。

500年以上も続く、人間関係を深めるための<sup>ならわし</sup>で、国の重要無形民俗文化財<sup>みんぞく</sup>になっています。

※数え年=生まれたときは1歳<sup>さい</sup>で、次の正月が来ると1歳増えるという数え方。



手前が親分夫妻、向かいに新成人



親分・子分「固めの盃（さかずき）」



元服を祝って舞われる三番叟（さんばそう）と  
夷大黒舞（えびすだいきくまい）

（写真：日光市提供）

## 〈「元服式」の様子〉

当日は、地区の住民が見守る中、<sup>もんつき</sup>紋付<sup>はおりはかま</sup>羽織袴で正装した新成人が、付け人を横に従え、親分夫妻と縁起物の料理（<sup>えんぎもの</sup>下写真）を挟んで向かい合います。



親分・子分はやオチョウ・メチョウと呼ばれる小学生がついた「固めの盃」を飲み交わしたあと、「血肉を分けた深い関係になる」という縁起から、生魚を食べ分けます。



## サナブリ

田植えが終わった後に、手伝ってくれた人たちをねぎらい、美味しい料理を食べたりお酒を飲んだりする慰労会いろうかいのことをいいます。家族や手伝った人たちが飲食を共にし、無事に田植えが終わったことを祝いました。

### 〈サナブリの説明〉

田植えは、今では機械化が進み、少ない人数でも作業することができます。しかし、昔の田植えは、苗代作りなわしろから田植えが終わるまで大変な忙しさでした。

特に、手で植える田植えは、長時間、腰こしを曲げた状態で作業を続ける重労働でした。したがって、田植えは多くの人手を必要とし、家族や近所など総出で行う集落あげでの共同作業となっていました。

サナブリは、田植えが終わって一段落ついた束の間の息抜きの日でもありました。農作業を休む日としていた地域もあります。

各家庭で行うもの（コサナブリ）と、集落全体で行うもの（オオサナブリ）があります。食べ物も、かしわ餅もちやあんころ餅たんざん、炭酸まんじゅうを作るところや、各家庭料理を持ち寄るところなど、地域や家庭によって様々です。



田植え

（昭和 48 年宇都宮市篠井地区  
柏村祐司氏撮影 県立博物館提供）

### 〈サナブリでは道具に感謝も！〉

オオサナブリの時には、田植えに使用した農具をきれいに洗い、お神酒みき※を供え、田植えが無事に終了したことに感謝をしました。そして、豊作を祈りました。

※お神酒＝感謝や願いを込めて、神様に供えるお酒。

家族や親戚しんせき、近所の人たちがお互い助け合って田植えをしていたまるね。サナブリで、人と人のつながりをより強めていたまるね。



## ジャンボン

お葬式そうしきのことです。大切な人が亡なくなったときに、人々は、その人のことを思ったり、様々なことを願ったりします。ジャンボンの儀式ぎしきには、亡くなった人への敬愛けいあいを込め、多くの地域ちいきの人々が関わって行われてきました。



のべおく  
野辺送り

(昭和 47 年宇都宮市  
柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

～とちぎしん人の想い～

昔は、地域の人たちみんなで役割を持って、協力してジャンボンを行っていました。とても遠くまでジャンボンツカイをして、お疲れ様でしたと感謝されたことを覚えています。

大切な人が亡くなることは、とても悲しいことまる。地域に住んでいる人みんなが、亡くなった人のことを思っていたまるね。



〈ジャンボンの説明〉

ジャンボンという呼び方は、ミョウハチ（シンバルのような形の仏教で用いる楽器）の音が「ジャランボーン」と聞こえるからといわれています。

地域によっては、ジャンポー、ジャーポー、ジャアポ、ジャンボなど色々な呼び方があります。

ジャンボンは、地域の人がお葬式そうしきや葬列れつに参加するだけではなく、墓はかの穴を掘ることや、棺ひつぎを運ぶこと、死者の服装を作ること、食事の準備をすることなどが含まれ、地域全体で、死者の霊魂れいこんを送り出す風習でした。

親戚しんせきなどに亡くなったことを知らせに行く人を、ジャンボンツカイといいます。ジャンボンツカイは、確実に伝えることができるように二人一組で出かけました。

## 十九夜様 (じゅうくやさま)

十九夜様は、女性の守り神です。19日に地域の人たちが集まって十九夜様をまつり、地域内の女性の安産を祈った風習で、今も続いているところもあります。県内には、各地に十九夜様の石仏を見ることができます。



十九夜様

(昭和46年宇都宮市岡本)

柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

## ～とちぎ人の想い～

私の地区では、年に一度ですが、ふたまたの杉の木を塔婆(祈りの文字が書かれたもの)にして、酒、米、削り節、塩、線香といっしょに十九夜様にあげます。昔は女性だけの参加でしたが、今は、男女の別はなく、地域の各家に参加が呼びかけられます。これからお産する人たちの無事を地域のみなさんで祈るものであり、これからも続いてほしいです。

## 〈十九夜様の説明〉

月の満ち欠けが約30日で1周するので、昔は月の動きに合わせて1か月間を決めていました(旧暦という)。

そのため、月と人々の生活の関係は深く、月に願いや感謝の思いを込めた行事を行ってきました。

栃木県内では、旧暦の十九日は、回り番の当番の家に地域の女性が集まって安産を願いました。そのなかで、「十九夜様の石仏の前に供え物をする」、「まつる場所に塔婆を立てて祈る」、「月が出るまで念仏を唱え、飲んだり食べたりする」などしました。

「十九夜様」は、日ごろから家事や子育て、農作業に忙しかつた女性たちの楽しみとして、飲んだり食べたり、世間話に花を咲かせたりした日でもありました。



地域の人たちが語り合い、絆を深めた行事だったまるね。

## 高竿灯籠（たかんどろう）

はつぼん むか  
 初盆※を迎える家のご先祖様が、迷わずに自分の子や孫  
 が住む家に帰ることができるよう、遠くからでも見える  
 目印として高い<sup>さお</sup>竿の先に<sup>とうろう</sup>灯籠をとりつけたものです。

※初盆＝人が亡<sup>な</sup>くなって四十九日を過ぎてから初めて迎えるお盆のこと。  
 新盆（あらぼん、にいぼん）ともいいます。



庭先に立てられた高竿灯籠  
 （平成 22 年大田原市湯津上 県立博物館提供）

～とちぎ人の想い～

「<sup>かま</sup>釜の<sup>ふた</sup>蓋」が開くと、ご先祖様の13日間  
 の旅が始まります。

トウロウに明かりをつけておきますから  
 迷わず帰ってきてくださいね。

亡くなった人を思う気持ちか  
 が込められているまるね～。



## 〈高竿灯籠の説明〉

灯籠を高くかかげる風習は古くから行  
 われているようで、鎌倉時代<sup>かまくら</sup>に書かれた  
 本（『明月記』）には、京都で高灯籠<sup>たかんどろう</sup>が使  
 われた記録が残っています。

昔は、丸太が使われていたようです  
 が、今では、竹竿で作ることが多いよう  
 です。竹竿の先には、<sup>すぎ</sup>杉の葉で三角矢を  
 つけます。竹に、亡くなった人の歳<sup>ちいさ</sup>の数  
 だけ縄で作った輪を巻き付ける地域もあ  
 ります。

以前は、小さな滑車<sup>かっしや</sup>とひもを使って灯  
 籠を上げたり下げたりしたようですが、  
 今では多くの家では電気で明かりをとも  
 しています。

コウカトウロウ、タカトウロウなど地  
 域によって様々な呼び方があります。

県の北部から東部（芳賀郡や那須郡、  
 塩谷郡を中心）にかけて、現在でも作ら  
 れています。

## 天王祭（てんのうさい）

えきびょう 疫病が流行する夏に、たいさん きがん 疫病退散を祈願して行われるお祭りです。病気の流行を防ぐために、神輿を荒々しく担ぎまわったり、だし やたいばやし 山車や屋台囃子が出されたりするのが、このお祭りの特徴の一つです。とくちょう 栃木県内でも「夏祭り」として各地で行われています。



喜連川天王祭  
(昭和後期 県立博物館提供)

「天王祭」が始まると、  
「夏が来た!」と感じるまる☆☆  
大人も子どもも、  
みんなが楽しみにしている  
お祭りまるね☆☆



## 〈天王祭の説明〉

天王祭のほか、「お天王さん」、「祇園祭」、「八坂祭」と呼ぶところもあります。

「喜連川天王祭」のあばれ神輿は、観衆にぶつかりそうな勢いで神輿をくねらせて進むのが習わしです。また、昔の大名行列を再現した「百物揃い」も見所の一つです。

益子町の「八坂神社祇園祭」では、祭られた神様は女性といわれ、神輿の担ぎ方もしとやかだといわれています。

各地域に伝わる夏祭りは、疫病退散を祈願することに加えて、地域の人たちのつながりや地域の伝統を守ってこうという想いを育んできました。

ユネスコ無形文化遺産に登録された那須烏山市の「山あげ行事」も、この流れをくむものです。

## どんどん焼き

竹、もみの木、<sup>わら</sup>藁などで仮小屋を作り、子どもたちが、1月14日※に各家庭をまわって集めた正月の松飾りなどをその日の夜か1月15日に燃やす行事です。松飾りといっしょに「まゆだま」と呼ばれる<sup>だんご</sup>団子をもらい、これをその火であぶって食べます。この団子を食べるとかぜをひかないといわれています。

※最近では、1月の第2土曜日などと地域で決めて行われています。



まゆだまをあぶる子どもたち  
(平成18年鹿沼市 県立博物館提供)

### ～とちぎ人の想い～

私の地区では、毎年1月15日前後の土日を利用して田んぼで行います。子どもたちが地区内の正月飾りを集めて回り、育成会の大人が軽トラックに積んでいきます。子どもが来た家では、子どもたちの代表にお年玉を渡します。育成会、婦人会、<sup>ちやうじゆ</sup>長寿会、消防団、自治会が分担して行事を支えています。地域の人がつながって行われる恒例行事です。

### 〈どんどん焼きの説明〉

正月三<sup>さん</sup>が日<sup>にち</sup>を大正月というのに対して、1月15日を中心とした3日間を小正月といい、<sup>あくえき</sup>悪疫・<sup>やくじん</sup>厄神の侵入を<sup>しんにゆう</sup>防ぎ、<sup>ご</sup>五穀豊穰、<sup>こさず</sup>子授けを<sup>いの</sup>祈るなど、様々な行事が行われています。どんどん焼きは、小正月の代表的な行事の一つであり、全国的には左義長（さぎちょう）とも呼ばれています。

<sup>こよみ</sup>暦が<sup>こよみ</sup>発達する前は、満月が一番目立つ日であり、この満月を中心に重要な行事を行っていました。そもそも、どんどん焼きが行われる小正月や、夏のお盆、十五夜は満月の日の行事でした。

県内では、古くは「トリヤキ」、県東地方では「ハーホイ」、日光では「ドーロクジン」などと呼ばれていました。



## ぼうじぼ、わらでっぼう

子どもたちが、「ぼうじぼ当たれ、そば当たれ」などとかけ声をかけながら、わらで作った棒<sup>ぼう</sup>※1で地面をたたいて歩き、各家を回ります。その年の豊かな実りへ感謝し、来年の五穀豊穰<sup>ごこくほうじょう</sup>※2を祈る行事です。

※1 わらで作った棒=県の南部では「わらでっぼう」、県の中央部では「ぼうじぼ」、県の北部では「豊年棒（ほうねんぼう）」という呼ばれ方があります。

※2 五穀豊穰=作物が豊かに実ること。



ぼうじぼでたたく

(平成 28 年さくら市蒲須坂 県立博物館提供)

### ～とちぎ人の想い～

- 声の掛け合いが楽しかったです。
- ご褒美がほしくて、大きな声でさげびました。

自然の恵みに感謝して、  
地域の人ともっと仲良くなれる、  
すばらしい行事まるね～。



### 〈ぼうじぼの説明〉

県内各地で十五夜や十三夜などに行われてきました。かけ声は、地域によっていろいろあるようです。

「十五夜のわらでっぼう、大麦当たれ、小麦当たれ、三角畑のそば当たれ」、「ぼーちぼつたれ山芋」などと唱えながら家々を回ります。

地面を打つことによって、作物に害をあたえるモグラを退治できるといわれており、近所の家をまわると、ご褒美にお菓子やお駄賃がもらえます。

打ち終わったら、柿の木にかけておき、たくさん柿が実ることをお祈りしました。



〈下野かるた〉『つ』より

## 結（ゆい）・結（ゆい）がえし

昔は、田植えなど、人手のいる大変な作業を行うときには、<sup>ちいき</sup>地域の人がお互いに<sup>たが</sup>労働力を提供し合う、「結」という仕組みがありました。「結」で自分の家が助けてもらったら、「結がえし」といって助けてもらった家の仕事を労働力でお返ししました。



結による田植えの様子  
(大正時代頃 高根沢町  
阿久津眞氏撮影 県立博物館提供)



結によるかやぶき屋根のふきかえの様子  
(昭和期 那須塩原市(旧西那須野町)  
那須塩原市那須野が原博物館提供)

## 〈結・結がえしの説明〉

栃木県では、「ゆい」がなまって「よい」、「えい」、「よいどり」と呼んだり、県南地区(小山市など)では「イツパカ」、「イシゴト」などと呼んだりしました。

田植え、<sup>いね</sup>稲刈りの他にも、<sup>あさ</sup>麦刈り、麻の種まきなども結で行うことができました。

田植えなどの結では、必ず近日中に結がえしをしましたが、それ以外にも屋根ふき(カヤやワラで屋根をふくこと)や<sup>そつしき</sup>葬式なども、結によってお互いが助け合って行っていました。

結には、大変なときや困ったときに近所や地域の人どうしが助け合う、思いやりの気持ちがもとにあります。こうした結の心は、時代が代わっても失いたくないものです。

こま  
困ったときには、助け合うことが大切まる。助けてもらったら、お返しすることも大切まる。

